

由利公正と横井小楠の政治思想と実践

——由利公正の福井藩時代の実践を中心として——

中 拂 仁

目 次

- 一 由利公正の略歴
- 二 福井藩における横井小楠の影響
- 三 由利公正の福井藩での実践

一 由利公正の略歴

全国的に種々の理由で藩財政の破綻が露呈しかけていた天保九年（一八三八）、借財が九〇万両を越えると言われていた越前福井藩の新藩主に、御三卿家の一つ田安家から斎匡の八男、錦之丞（後の慶永・春嶽）が十六代藩主として襲封した。

慶永が藩主を襲封する九年前の文政十二年（一八二九）、由利公正は三岡家の長男として福井で出生している。父は義知、母は幾久、名目的な収入（秩禄）は百石であったが実質的には、僅か三十二石余の年収であったといわれて

いる。まさしく赤貧洗う状態であつたと言えるであらう。

幼少より青年期に至るまでを通称三岡石五郎、後に八郎（文久二）、公正（明治元）と改名、更に祖先の姓である由利（明治三）に復している。

三岡石五郎時代の由利青年は、槍術を初め剣術、馬術、砲術等は人並はずれた實力であつたが、學問に関しては四書五經の素読終了に十七、八歳頃までかかつた程の晩學であつたと言われている。晩學ではあつたが武術一辺倒の只單なる粗野な青年ではなかつたこと、つまり心の有り様には心掛けていたことを窺わせるものが『子爵由利公正傳』にある。

「父が常に云われるには士は御國の爲に扶持せられて居るのだが、其方は何者になるぞ。何を以て御國の爲につくすぞと問はれるのでハイとはいふもの、殆んど困つて返答した事がない。或日庭の草取をして居てフト考へた、川原に出てゐる手品芝居は、子供、大人皆一人前の藝をして世を送る、百姓は勞働を以て家を興す。士は人に養はれ文武をこと、するが、果して之が役に立つだらうか。勞力を較べれば百姓日雇の者に及ばない。之は何でも心の事ぢや。心が忠孝の道に暗くないことが肝心で、心次第で國の御用にも立つことぢやと感づいた時、少々氣丈夫に覺えた。」

『子爵由利公正傳』（八頁）

この精神の持ち様が三岡青年二十歳の時、藩主自ら文武節儉の先頭にたつて努力をしているのにもかかわらず、民衆は一向に潤わないばかりか、農民に至つては過酷な年貢の徴収に依り、多くは麦・芋・大根を主食とせざるをえない状況であることに同情以上の義憤を感じ、彼をして藩の勘定場に赴かせることとなる。そして歳入、歳出、米その他の生産高、消費高を調べたのであつたが全く要領を得なかつたので、自ら村々を四年間の歳月を費して調査に向か

わしめたのであった。このような素地があったればこそ、後述の横井小楠の説く儒学を記誦詞章の学から実学に、つまり「民富論」的富国策をスムーズに受け入れることができたのである。また、後で詳述（三節）するが、小楠の影響を受けつつ、安政五年（一八五八）の末から慶応三年（一八六七）新政府に徴士参与として出仕するまでの約六年間、紆余曲折はあったものの藩財政改革に敏腕を揮うのである。

三十八歳の時徴士参与となった由利は、新政府（討幕）軍の御用金取扱いに任じられ、京坂の間屋商人を対象に御用金（会計其立金）三百万両の徴募に成功したり、太政官札（金札）を発行したりして、明治初年の新政府の財政基盤を築いたのであった。この財政基盤の確立が、脆弱な維新新政府の一連の旧幕府軍掃討の軍事行動や、以後の改革を推進する上で、それらをことごとく成功に導いた遠因でもあったのである。また、後に五箇條の御誓文の原案となる、「新政府の綱領五ヶ條」をも起草している。

明治二年（一八六九）、病氣を理由に参与を依願退職して福井に帰ったのであったが、この年六月版籍奉還が実施されたため、福井藩知事となった藩主茂昭の補佐を命じられ、同四年（一八七二）再び明治政府の下で東京府知事に任命されるまでの二年間、またもや福井において諸々の再建に寄与するのであった。

東京府知事となった由利は、まず治安回復を先決に警察制度を改革してポリス制を敷き、西郷隆盛の斡旋で鹿児島から羅卒千名を初め、全国から三千人の羅卒を徴募して、今日の巡査制を誕生させている。翌年（一八七二）二月、和田倉門内の旧会津候邸跡からの出火により焼土と化した銀座の復興策として、煉瓦作りの建築物と道路の拡副を実施し、東京の都市改造の端緒を開いたのであった。

さらに、同年岩倉遣外使節団に一員として随行し、アメリカ、ヨーロッパ諸国の自治制度および議会制度を視察し

ている。滞欧中に理由も判明しないまま府知事を罷免され、帰国後福井でまた産業育成に奔走している。

明治七年一月、副島種臣・後藤象次郎・板垣退助・江藤新平等の同志と計って「民選議院設立ノ建言」を政府に出している。そのためか一時政府から危険人物と警戒もされたようであったが、旗幟を鮮明にして正々堂々とした行動をとっていたため、翌年には元老院の第一期の議員として任命されたのであった。

明治二十三年（一八九〇）、由利公正六十一歳の時、貴族院議員に勅選されている。そして明治四十二年（一九〇九）四月二十八日、八十一歳でその生を全うしている。この間、同二十年には子爵に叙されている。

二 福井藩における横井小楠の影響

横井小楠は、文化六年（一八〇九）熊本肥後藩藩士の横井大平時直を父に、かずを母に横井家二男として、熊本城下の内坪井に生を受けている。幼名を又雄、長じて平四郎、小楠・沼山・畏齋は号である。横井家は名目的には一五〇石の知行であったが、実質的には六〇石ほどで時によつては、僅か一七石の収入しかないこともあったと言われているので、先述の由利公正の暮し向きとさほど変わらないようなものであったと思われる。

小楠八歳の頃、藩校「時習館」に入校、二十五歳で居寮生に選拔され、さらに二十九歳の時には居寮長に拔擢されている。この間、兄の家督相続により二十三歳で兄の扶養家族、所謂「厄介」となっている。

天保十年（一八三九）、小楠三十一歳の時に江戸遊学が命ぜられ、江戸において佐藤一齋・松崎謙堂・藤田東湖・川路聖謨等、多士濟々な人々との交誼を持っている。特に藤田東湖には触発される所が大きく後期水戸学の洗礼を、

この時点では受けている。即ち攘夷の立場を取っている。開国論に転ずるのは、嘉永六年（一八五三）ペリーの浦賀来航に次いでブチャーチンが長崎へ来た時であったとされる。何故ならば、幕府は応接のため川路聖謨を派遣するが、小楠は川路に会うため長崎へ出向いている。行き違いがあつて川路とは会えなかったが、『夷虜応接大意』を認めて長崎奉行に託している。この『夷虜応接大意』は、小楠の外交観を知る上で非常に大事なものである。『夷虜応接大意』に、

「有道の國は通信を許し無道の國は拒絶するの二ツ也。一切拒絶するは天地公共の實理に暗して、遂に信義を万國に失ふに至るもの必然の理也。——中略——然ば今彼（ペリー・筆者注）答には有道を許し無道を絶ち、國是の大本として一切鎖國するの道にはあらざる事を明に示し、……」

『横井小楠遺稿・夷虜応接大意』（十一～十二頁）

のように、開国論へと転じているのである。

ところで、この年の暮東湖主催の忘年会に招かれた折、意気投合した二人は深更まで時事問題について談論風発したと言われている。このことが江戸肥後藩庁の忌避に触れることとなり、翌年帰藩の命を受け、十二月にはへ酒失の故で七十日間の逼塞に処せられている。

この処分を受けている間に、「学」の本質の再考究・再構築を計るのであった。また、時習館時代の学友であつた長岡監物・下津休也・萩昌国・元田永孚等と研究会を開いている。後にこの研究会が肥後「実学党」へと発展するのである。この研究会を主唱する小楠は、幕府の所謂官学となつてゐる林学派の朱子学を、記誦記章の学であると批判し、学の本質を「治国安民」・「経世済民」・「利用厚生」に見出したのである。つまり、政治の本質・政治の有様と

為政者の果すべき役割にその真髓を発見したのであった。特に『大学』の三綱領八条目中の八条目の最初に置かれてゐる「格物」の解釈を徹底化するのであった。朱子学という「格物」は物の理を究めることを重視・尊重することであり、物の特性を究めてそれを活かし民生に活用することが重要であると主張するのである。すなわち、人間が自然の物質全体に働きかけて生産的機能を果たすことが要求されるのである。つまりそれが「利用厚生」の道であり「安民」へ、また「済民」へとつながるのである。そこでそのような状況や機会を提供する、すなわち安定した社会環境を作り出すのが政治家の役割である。これが「格物」以後の「致知誠意正心修身齊家治国平天下」に連繫すると解釈したのであった。このような立場から、天保十四年（一八四三）『時務策』を著わし

「凡て是迄被^レ仰出たる節儉は上の御難澁に因て諸事御取^レメに被^レ及、御家中手取米を減ぜられ又は町・在に懸け寸志銀を取らるる道行にて、一ト口に云へば上の御難澁を下より救い奉る故に節儉を行はせらるゝと云筋に當り、是は節儉と云ふにて無く聚斂の政と云ふ者なり」

『横井小楠遺稿・時務策』（六十九頁）

と、藩政を支配者のための聚斂の政であると厳しく批判するのも、学の本質を発見した表われであり、また強い信念となつていたのであったのである。

そこで福井藩との接点であるが、嘉永二年（一八四九）藩主慶永の意（天下の大儒を招聘して学校を興し、教育を盛んにすべし）を受けて、藩士の三寺三作が諸国遊歴の途上、熊本に立ち寄り二旬の間小楠塾で指導を受けている。三寺からの書簡に、小楠の思想に大きな感銘を受けたことが記されている。この三寺との邂逅が熊本から遠く離れた福井に、小楠の名を広めることとなり、安政五年（一八五八）越前藩からの招聘につながるのである。「学」の本質を再構築した小楠は、嘉永四年（一八五二）二月四十三歳の時、「学」の本質の更なる確実性を求めよう考えたので

あろうか、上国遊歴に出発している。北九州から山陽道・南海道・畿内・東海道・北陸道などの二十余りの諸藩を歴訪し、それぞれの地勢・制度・財政・人材・学校などを重点的に視察して、『遊歴聞見書』『東遊日録』にまとめている。このように各地の民情の細かな観察という実体験に基づく「事実の重視」が、益々小楠の「学」の確実性を顕著化させていくのである。

この上国遊歴中の六月十二日福井を訪問する。二十一日、次の訪問地の金沢へ出立するまでの十日間、賓客の待遇に接しながら、先の三寺を初め吉田東篁兄弟・岡田準介・村田氏寿・由利公正など多数の藩士に講義している。このようにして小楠の思想は福井藩に浸透していくのであった。そして金沢から再び七月六日福井に入るのである。二十一日、福井を離れるまでの十六日間もまた多数の藩士への講習に明け暮れている。その間に三日間、過労と暑氣中りのため床に臥せるということもあった。この滞在期間中の福井藩の歓迎接待振りは本当に至れり尽くせりで、藩政府は小楠一行を藩費で賄い、稲葉家の別荘で貴賓の待遇で接し、吉田東篁はじめ篤学の士は争って小楠の教えを乞い、その欽慕の念は切なるものがあつたといわれている。

約半年の長きに渡った上国遊歴も八月二十一日で終わる。その識見に感服した福井藩は、藩校を新たに創設するのに小楠の意見を求めてきたのである。小楠は早速『学校問答書』を草して、「学政一致」の原則を説き、より現実的なまた「学」の本質に基づく政治の在り方を、ここでも主張するのである。

上国遊歴から安政五年（一八五八）、正式に福井藩に賓師として招聘されるまでの八年間は、兄の死去に伴ない家督を相続したり、長岡監物と「学」の解釈で意見が分かれ絶縁したり、この絶縁が肥後実学党の分裂に連繋するのである。また、藩の扶持だけでは暮してゆけず、近郊の沼山津に転居したりしている。

安政四年（一八五七）五月、福井藩士の村田氏寿（文政四・一八二一〜明治三十二・一八九九）が、小楠を賓師として招聘したいという慶永の命を受けて来熊する。慶永の命は

「其方承知の通一昨年明道館創建致し、文武一致政教不岐の趣意に有之——中略——肥後横井平四郎、其方兼て心安く致候由、其人となりの事は此方にも毎々聞及、致承知居候所、先日同人より其方えの來書、家老より差出候に付篤と致披見候。其見識學力は是迄聞及たるよりも感心致すべき事に覺ふ。ケ様の人物を相談人に頼み候てこそ初めて念願も成就致すべく、依之平四郎此表へ参呉候様致度、此使其方え申付候間、早速罷越可致心配候」

『横井小楠伝・上巻』（二七七〜二七八頁）

というものであった。

村田は来熊してからいろいろな人物と面会して小楠招請のことに奔走している。しかしながら、既述の如く『時務策』の中で藩政批判をしたり、へ洒失の故で処罰されたりで小楠は熊本藩の上級層には相当忌避されていた。万端を尽くした結果、村田のたどりついた行く先は、藩主の慶永（春嶽）を動かす以外に方法は無いということであった。というのは、熊本藩主の細川齊護の娘が、慶永の妻室という関係から解決を図るしか方策は無かったのであった。そこで慶永は八月一二日付けの書簡を江戸から熊本に在る藩主細川齊護に送っている。その中で

「其御家來横井平四郎儀は、先年諸國遊歴の序に弊國え罷越候節、家來共の内え致面會相談等仕候族も有之候て、兼て人柄聞及居候。依之、近比粗惣恐縮の至御座候得共、於尊藩格別ご指支の儀も無御座候得ば、右平四郎儀當分御借受申、弊國子弟教訓の世話頼申度奉存故、何卒乍御難題來冬迄小子え御貸置被下候様奉頼上候。左候は、平四郎儀は於弊國知る人に御座候故、老年教官の者共夫々力を得、其

内には壯年の者も取立候様相運可^レ申、旁以都合宜御座候間、何分懇願の次第御聞届被^レ下候様、吳々奉^二仰望^一事に御座候。」

『横井小楠伝・上巻』(二九三頁)

と、非常に丁寧な文章で切々と懇願していることが、この文面から読み取れるであろう。この書簡に対して熊本藩では、藩主齊護が重臣達の評議を受けて、慶永に十月二三日付けの返書を次のように送っている。この間にも慶永側は様々な方策を巡らしている。

「八月十二日の華翰相達致^二拜見^一候。

——中略——

家來横井平四郎儀は先年諸國遊歴の砌貴國えも罷越、御家

來の内面會相談等いたし候族も有^レ之候て御聞及被^レ成候由。依^レ之子弟教訓の世話として平四郎儀來冬迄御貸申候様御相談委曲被^二仰越^一候御端書の趣共具に承知仕候。任^二其旨^一早速差出可^レ申處、右の者は御家中子弟教訓の世話などいたし候教官の場には至兼可^レ申、兼て不安心に付、家老共えも得斗評議爲^レ致候處、是以同様の趣申出候。左候へば。差出候ても却て御用に相立申間敷、御用に相立不^レ申見込の者を差出候ては重疊不本意の次第に付、何分貴命に應兼、不得^レ止御斷申上候。」

『横井小楠伝・上巻』(三〇五頁)

まことにつれない返事であつた。娘婿の依頼も、藩の重臣達の小楠への最悪の評価によつて一陣の風のごときあらいであつたのである。重臣達の評議の結果は、国家(この場合は藩)のために成る有為の人材の所望ならば喜んで応じるけれど、小楠はそれほどの見識を持つているとは思われない。そもそも「学」の解釈が偏っているし、藩政も批判する。従つて貴藩に貸し出して役に立ちそうもないし、却つて問題を起こすのではないかと危惧する。といううなものであつた。

そこで、慶永は再度書面を以て懇請することとし、十二月二十五日付けで小楠招請を切望する旨を、熊本に滞在す

る細川齊護に送ると共に、齊護と交代に出府していた世子細川右京大夫に面会して、書簡の内容を篤と話し父親の説得を依頼している。ここに福井藩の藩を挙げての小楠招聘の動きが読み取れるのである。

このような熱意に、強いて拒絶すれば慶永の面子をつぶし兼ねないと考えたのであろうか、熊本藩は、安政五年（二八五八）二月十九日付で以て、横井小楠の福井行きを漸く決着するのであった。

三月に熊本を發ち、四月初め福井に到着、福井藩では五十人扶持で賓師の礼を尽くして迎えるのであった。安政六年（一八五九）一月、弟の死去で帰熊するが、四月には再度福井入りをする。そして、同年一二月今度は母の死で帰熊する。翌万延元年（一八六〇）、三度福井に赴くのである。この年の七月、『国是三論』を著わしている。

次節で由利公正の実践を通して、小楠の福井での実際をその構想と指導を見て行こうと思う。

三 由利公正の福井藩での実践

さて、小楠の招聘を決定した頃の福井藩ではどのような藩改革の方針が、立てられていたのであろうか。まだまだ守旧派の勢力も侮れない状況ではあったが、藩政改革が慶永の下、橋本左内・吉田東篁兄弟・岡田準介・村田氏寿・鈴木主税・由利公正等々、若手を中心に着々と進められていたのである。安政五年帰国の予定であった慶永は、四月に幕府から国家大事の時期であるとの理由で滞府を命じられた。そこで家老を通じて在藩の士に、七条目からなる改革方針とも取れるものを示している。

全文掲載は無理があるから重要と思われる所を、ここに挙げよう。この方針の骨子も小楠の影響を強く受けている

のである。

「一、政事向きの事

一、明道館文武の事

兼て趣意通り何分治教一致不相成候ては難^二相濟^一は勿論の儀。

此儀も前條同様致^二擔當^一、治道に不^レ反様取斗候事專要にて、徒に書物讀み或は武藝遣ひの多分に相成候を喜び候のみにては實に不^二相濟^一候。文學にて申せば、眞誠に識見相開、行々國事の相談も出來、經濟の學に進候様篤志の者と相議し、諸般可^レ及處置^一候。武事の儀も同斷、徒に武術遣ひのみ出來候ても其所詮更に無^レ之、是又充分實地丈夫の武術に致度。

一、軍制の事

此儀も一通りは出來有^レ之候得共、此上とも厚致^二研究^一、治亂兩途に不^二相成^一様の處置可^レ有^レ之とも存候間、精力を盡し取調候様可^レ致候。

一、訓練の事

—略—

一、農工商諸政の事

富國強兵の根本に候へば、此學術大に開け百工の政治まり不^レ申候半では、亦も如何程心力を盡候ても萬々不^レ參候。

一、物産の事

昨年公邊にも及^レ達候通にて、方今此業專要の事に候へば、第一自國の產物を初夫々富國の處置有^レ之度。其上は山嶽海川の利を興し大に派立候様取計。是等一、二人にて取行候事も出來申間敷候得ば、有志の者と折角申談し、負擔盡力可^レ申候。

一、航海術の事

方今の急務に候得ば、造船等の事追々派立候儀には候得共、別て其方共厚相心

得、有志の向へ申談、此道相開け諸般一と際は派立候様可^レ致候。」

『横井小楠伝・上巻』（二三二―二三三頁）

小楠の指導を受けながら、慶永の示したこれらの方針に沿って、藩政改革は実践に移されるのである。

では、この福井藩における藩政改革はどのような形で実践されたのであろうか。それらのことを、由利公正の足跡を辿ることによってその一端を見ることがしたい。

先ず由利公正は、先述のごとく嘉永四年、公正二十三歳の時初めて小楠に接する。その時、小楠の活きた朱子学の講義を聴く。このことは公正の考えていた自分の方針を、さらに覚醒させる出来事であった。というのも、冒頭で触れた通り彼は藩財政の不備について、四年間の歳月を費して実地に見聞している。そこに小楠の実学の講義に出会うのである。この嘉永四年の小楠との邂逅が、公正を通じて初めて実地に自信を持って向かわしめたものとして見てもいいのではあるまいか、と思われる出来事であったのである。大局的に見て、由利公正の福井藩での藩財政改革の辣腕振り、さらには明治新政府での経済財政政策の的確さを見ると、小楠の影響を受けながらも公正自身の数々の実践に裏付けられた、また正鵠を得た意見等によっていることに、納得させられることには誰も異論の無い所であろう。

由利公正は、安政五年（一八五八）三月に京阪地方經由で江戸出府を命じられている。京都滞在中に、橋本左内と共に福井へ急ぐ小楠と会っている。また、大坂で与力の大久保要に会い、大久保から徳川で鑄た金は佐渡の金山から出たならば現在の金は、増えていなければならないのに逆に減っている、との示唆を受ける。公正はその疑問点を大久保に糺すと、その答えは幕府が改鑄を重ねた結果であって、天下の政治の位を見るのはその時点での通貨で見ればすぐ分かるものであると教えられ、近い内に徳川は減びる事まで示唆されている。このように幕府財政につい

て詳細に聞いたことも、福井での殖産あるいは貿易事業の活発化に繋るのであった。四月には江戸入りするが、一〇月に帰藩するまでの約半年間、公正は春嶽の膝元において將軍継嗣問題で勤皇派同志との画策に駆け回っていたのである。と同時に幕府財政に関する事をも詮索し、その脆弱性を見抜いていたのである。

また、在府中に公正は、福井の不況・疲弊にひきかえ、幕府の膝元である江戸の賑いを見て、この地が吸収する貨幣の一パーセントでも自藩に引き寄せることは出来ないものかと思案したあげく、

「どうもそれが何ぞ有りさうで堪へられぬ。何ぞしてこれを引けさうなものだと思ふた揚句に、ハテこれは引ける。民力ぢや、物産ぢや、物産に付けて引けば百分の一を引くのは易い。物産さえ起せば、即ち桑畑に金山が出来たと同じ事だ。如何程な金山を得ると雖も、民力で日夜に引く程大きいものはないと始めて氣がついた。」

『子爵由利公正傳』（七六頁）

と、結局は物産を起して交易を盛んにしなければならないとの結論に達するのであった。従来の孤立經濟を改革して通商を盛んにして、繁栄を計ろうとする画期的な考え方であったということができであろう。

二十九歳になった由利公正は、一〇月に帰藩して先ず海外貿易実情視察の資金を要請する。しかしながら財政状態の衰弱（生産高約一八万両に比して消費高約二〇万両）した福井藩では、視察資金の準備どころか公正の積極策にさえ難色を示すのみであった。そこで公正は藩の会計担当の重役に対して、次のような私案を提示するのである。

「その作用は力役者（勞働者）二十萬人と見積り一人二分の資本を貸付ける。但し實際は一時に一分を渡さず、工業により多少長短の差があつても運轉自在、即ち總會所の時宜に任せるので、例へば一人の女が五十文の綿を買ひ絲を引けば凡そ六十五文となる。無用の藁も繩に絢へば十文の値があると云ふ様に、總て人民の隨

意に任せ二十萬人で一日十文宛稼げば、一日二千貫文即ち三百三十兩の富を爲す。三十日にして九千九百兩、一ヶ月殆ど一萬兩の富を得られる。されば五萬の國債を起しても、決して憂ふるに足らぬ。」

『子爵由利公正傳』（七八頁）

と、五万兩の切手を発行し國債として民間に貸付け、総会所を設置して資金の運用を計るものであった。しかし、当時の段階で二十万兩ものの負債藩札を抱えておるような状況で、藩の重役達はおいそれとこれを許すはずも無かった。更に頑迷固陋な重役達には、公正の説く所ことは理解の及ぶものではなかったのである。紆余曲折を経て約一ヶ月後に漸く「切手五萬兩増發の建議」は認められた。

安政五年十二月半ば、賓師として越前に迎えられていた横井小楠が初めて帰郷を許された時、公正は外国貿易の現況及び貨物集散、運輸の実地調査の藩命を受けたので、小楠の帰省に下関までの同行を命じられている。歳末に下関到着までの約半月の間、小楠と公正は起居を共にしたのであった。同行者は三人であつたが道中公正一人だけが酒の相手をさせられて、それまでは飲めなかつたが飲めるようになった事等のエピソードが、『子爵由利公正傳』に少し自慢げに披露されている。この半月の間に小楠の思想が公正の中に存分に注入されたことは想像に難く無い所である。このことが公正の福井藩での殖産事業の更なる飛躍に連繋するのである。

下関で小楠達と別れた公正達は、暫く逗留し藩の船宿を設ける準備やその他の調査を開始するのであった。当地では、長州藩が商取引を始め諸々の経済活動に対し一切不干渉主義を採り、完全に自治に委ねた結果非常に繁栄している様を見て、公正は信用貸借の一つである為替取組法を採っていることを学び、後に自藩で為替法を実施する基盤に連繋させるのである。

翌安政六年（一八五九）正月、公正は熊本の沼山津に小楠を尋ねている。ここでも歓待されて小楠の「四時軒」で、門弟達と活発な意見交換を行うのであった。二か月の滞在中小楠の尽力に依って、奉行・大庄屋等に紹介され熊本の貨物集散、販売の状況を視察している。

三月、公正は長崎に赴き、旧知の仲である唐物商の小曾根六郎（乾堂）に依頼して、越前蔵屋敷の建築地を紹介してもらっている。「波の平」という所に約一町歩の土地を購入し、蔵屋敷つまり倉庫を新設することとなるのである。次いで小曾根乾堂の斡旋で越前の生絲、醬油等の輸出をオランダ商館と契約したのである。その際、製品の詐欺・贋作防止のため各商品に製造人の名札を付けて、もし粗製品のあった場合は直接藩に紹介すれば、藩吏がその責任は負う規約をも付けるという程、徹底したものであった。これが越前藩における藩貿易の端緒となったのである。長崎滞在中に製鉄所（今日の造船所）を視察したり、幕府の設けた長崎海軍伝習所のオランダ医官として来日していたポンペ（Meerdervoort van Pompe 1829 ~ 1908）の開いていた、長崎養生所（日本最初の洋式病院・長崎医大の前身）を視察して優秀な治療法に感激し、帰藩後は医学生を派遣することを藩に建議している。この建議は受け入れられ、万延元年（一八六〇）には、魚住順方・佐々木全・益田宋三・田代萬隆・浅野恭齊・吉田貞庵が、医学留学生として長崎に赴いている。

公正は、安政五年の暮からの下関・熊本・長崎への旅程を終えて、翌六年緒五月下旬に帰藩する。出発前の勘定奉行との内約であった、殖産資金五万両は準備されたものと思っていた公正だったが、藩では準備するどころか却って反対意見の方が強まっていて、また一悶着となったのである。しかし、再来していた小楠の取成しで漸く一〇月の末に、物産総会所の開設に漕ぎつけることと成るのである。

資金調達の用途はついたものの、今度は武士を始め農民町人の無理解への説得という大きな難題が待ち構えていたのである。その時の苦勞とその苦勞が報われたことについて、

「それから私は耐らないから、直ちに草鞋を履いて村々を一人で歩き始めたのであります。そして實業家に會ふて話をすると、話す人も話す人も悉く同意せざる人は一人もない。それで實業家が寄つて組立てて、その時名前がなかつたから、總會所といふ事にした。總會所といふ名をつけた所以は、即ち何もかもそこで一緒にしてやらうといふ相談で、即ち實業の親和で、何でも人間が助かりさへすれば宜いから、根氣一杯働かうといふ相談場所である。さうするといふとその時は米價は高し、困難な時でありましたから一月ともたたむ中に皆寄つて來て直ぐ纏まつてしまつた。それから爺さん達までも總會所へ行つてリキンで居る様になつて餘程盛んになつて、私も本懷を得て喜んだことであります。」

『子爵由利公正傳』（九二―九三頁）

とある。この物産總会所の仕組みは、總責任者に資産名望のある商人を選出し、會計の監督に藩庁から一人を派遣する以外は、殆ど商人の自治に任せるものであつた。また物産の生産方法についても各自の意思に任せ、生産物の種類も規定するものではなく、老若男女に内職的生産物も奨励したといわれている。このため主要な物産は、苧・木綿・蚊帳地・生絲・茶・麻等で、内職的生産品には縄・草鞋・蓆等であつた。

それに資金の貸付に対する公正の考え方も理に適つたものであつた。つまり、当時の民間の貸付金利は、月一割から一割二分であつたのを見て、藩庁からの金利を月八朱とし、藩と民間双方立ち行くように設定したのである。この方法を採用してから取引は徐々に活発になり、また荷為替の方法を採用したことで金融も円滑に行き、自然と正貨の流入が増加していった。その結果、文久元年の末頃の越前藩の金庫には、金三〇万兩以上の蓄えがあつたといわれて

いる。

さらに、次のように世相の変化も著しいものとなつていった。

「特に目立つたことは比丘尼の無くなつた事である。托鉢に來る比丘尼は随分多いものであつたが、小資本の物産を始めて以來は絶えてない事になつた。今一つ意外な事は物産の起るに随つて博奕の無くなつた事ぢや、

——中略—— 又長谷部が云ふには、近來盜賊が大いに減つた。全く仁政の效驗である」と。

『子爵由利公正傳』（九八頁）

民情を察知し、民富論的な国富を目指す積極的な政策が為された結果、この政策は他藩の羨望にさへなつたのである。安政六年から文久二年頃までの四年間弱の公正は、粉骨碎身してこの事業に邁進し席の暖まる暇も無い状態であつた。かくして文久元年三月奉行見習、翌二年（一八六二）九月に奉行に拔擢されるのであつた。

この事業の成功の裏には、横井小楠の適切で且つ懇切な指導と影響があつたことは想像に難く無い。小楠は『国是三論』を福井滞在中の万延元年（一八六〇）に草している。その『三論』の中での「富国論」で、換金作物栽培の奨励と官営物産所の設立を次のように提唱している。

「五穀租税の外并糸・麻・楮・漆の類を初惣て民間に生産する處舊來悉く商賈の手に賣渡す故に其價尤賤く、就中姦商に逢へば種々の欺詐を受けて其半價を得て止む者も亦多し。□^{配方}是を官府に收むべし、其價は民に益ありて官に損なきを限とし、官に於て別に利を見る事なければ民自ら其惠を蒙るべし——中略——

一 以上諸物産を作り出し或は作り増んと欲すれ共、力足らずして意の如くなる事を得ざる者多し。官又是に錢穀を貸して其の意を遂しめ其物品を官に收め、其價によつて其償を償しめ又利息を見る事なければ民大に

便を得て其惠を蒙るべし。

但元仕込・夫食・糞^{フンキ}し仕入といへる類悉官府より貸出し利息を取事なく、相對に高利の金銀を借の元費を

免れしむ。惣て官府の貸出しは元金を損せざる迄にて利を見る事なかるべし。官府の利は外國より取るべし。

一 以上の諸物件其他民間所産の生育・製法等に付簡便の方法器械等あるは先づ官に試み其實験を経て是を民に施し教へ導く」

『横井小楠遺稿・「国是三論・富国論」』（三十三―三十四頁）

等々に見えるように、小楠の思想の根幹である「民富論的国富論」を、公正が小楠の指導と影響の下、福井で実践したのであった。そしてそれが形が変わつたにしても明治新政府の財政基盤を作る上で大きな影響を発揮したのであった。

《参考文献》

- 『子爵由利公正傳』 由利正通編集兼發行（非売品） 昭和十五年
- 『横井小楠遺稿』 山崎正董編 日新書院昭和十七年
- 『横井小楠傳』（上・中・下巻） 山崎正董著 日新書院 昭和十七年
- 『横井小楠』（増補版） 松浦玲著 朝日新聞社 二〇〇二年
- 『横井小楠』（人物叢書） 圭室諦成著 吉川弘文館 昭和四十二年
- 『松平春嶽』（人物叢書） 川端太平著 吉川弘文館 昭和四十二年
- 『公武合体論の研究』（改訂版） 三上一夫著 御茶の水書房 一九九〇年
- 『横井小楠の新政治社会像』 三上一夫著 思文閣出版 平成八年

『福井県の歴史』 早田・白崎他著 山川出版社 二〇〇〇年

『松平春嶽未公刊書簡集』 伴五十嗣郎著 思文閣出版 平成三年

以上の他に、

拙稿「横井小楠野政治思想」(『政経論叢』六十七号)

「江戸期における「公」観念の推移」(『政経論叢』九十九号)

「横井小楠の「済民」観」(『経済研紀要』第六卷一号)

「横井小楠の開国論と『海国図志』」(『経済研紀要』第八卷一号)等を参照。

(この小論は、平成十二年度政経学会の補助を受けてのものである。横井小楠の思想が由利公正を通じて、福井で実践されたことの素描である。)